# 今週の為替相場見通し（2021年11 月22日）

| 総括表 | | 先週の値動き | | | 今週の予想レンジ |
|---|---|---|---|---|---|
| | | 注 | レンジ | 終値 | |
| 米ドル | （円） | | 113.59 ～ 114.97 | 114.03 | 113.25 ～ 115.00 |
| ユーロ | （ドル） | | 1.1250 ～ 1.1464 | 1.1300 | 1.1180 ～ 1.1430 |
| （1ユーロ=） | （円） | | 127.99 ～ 130.60 | 128.65 | 127.50 ～ 130.00 |
| 英ポンド | （ドル） | | 1.3400 ～ 1.3514 | 1.3443 | 1.3350 ～ 1.3550 |
| （1英ポンド=） | （円） | * | 152.53 ～ 154.74 | 153.34 | 152.00 ～ 154.50 |
| 豪ドル | （ドル） | | 0.7228 ～ 0.7370 | 0.7237 | 0.7150 ～ 0.7350 |
| （1豪ドル=） | （円） | * | 82.16 ～ 84.16 | 82.49 | 81.50 ～ 84.00 |

（データ）先週の値動きに関して、注の欄で無印の項目はみずほ銀行、*印の項目はブルームバーグ。

## 1．米ドル

金融市場部　グローバルFIチーム　大庭　泰典

### （1）今週の予想レンジ：　113.25　～　115.00　円

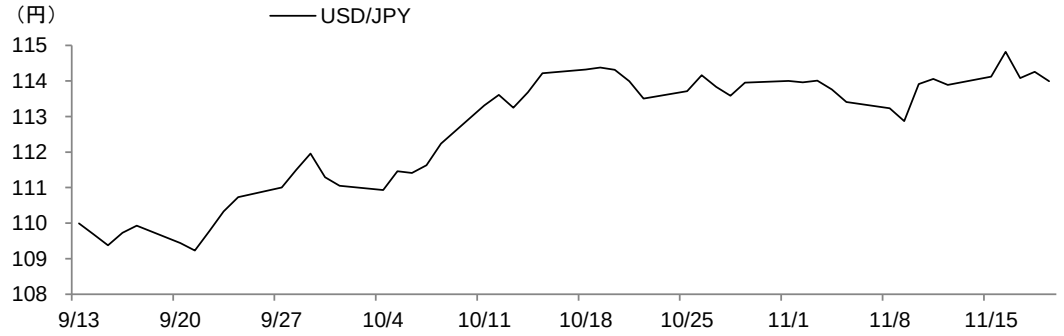
### （2）ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週のドル/円相場は一時今年度の高値を更新するも、週末は週初と同水準で越週。週初15日は114円付近でオープンしたドル/円は前週の米10月CPI結果発表後のドル売りの流れに加え、中国の10月小売売上高・鉱工業生産が予想を上回ったことで113.76円まで下落。米11月NY連銀景況指数が予想を上回ったことからドルが徐々に買い戻され114円台を回復。その後は揉み合い推移。16日は米中首脳会談の影響は特段なく、しばらくは114円台前半で膠着状態。米国時間に発表された米10月小売売上高が予想を上回る結果となるとドル買いが優勢。その後発表の米経済指標も予想を上回る結果が続く中、米金利も上昇する展開に直近高値を抜け114.85円まで上昇。17日は115円手前で反落。東京時間朝方には対ユーロでドル買い主導で上値を試すも115円のバリアの防戦売り等のオファーに阻まれ高値は114.97円まで。その後もドル/円は高値圏を揉み合う中、正午過ぎのユーロ急落を契機に114.94円まで上昇するものの115円手前の売りは厚く徐々に上値の重い展開となった。海外時間では株式市場は利食い売り優勢の展開。また原油価格の下落とともに米金利も下落基調に。短期的なストップを巻き込みながら一時113.94円まで下落。18日は114円台前半で揉み合いの展開。東京時間は114円を割れる場面も見られたが、総じて114円ちょうどを下値に小動き。海外時間に入ると米11月フィラデルフィア連銀景況指数が大幅な伸びとなり米金利が上昇すると、ドル/円も114円台半ばまで上昇。その後は買いが続かず114円台前半まで戻して引けた。19日は欧州でロックダウンに関するヘッドラインを受けて、リスク回避の動きが急速に強まり、ドルが買われる中クロス/円の売りが急速に持ち込まれ、ドル/円は113.59円まで下落。その後FRB高官の発言等を受けて114円台を回復し114.03円で越週した。

今週のドル/円相場は底堅い動きを予想。欧州ロックダウンが気掛かりではあるが、前週末の動き程度の下げ幅を想定。寧ろFRBのタカ派色の強い発言が高インフレの長期化に対する警戒を一段と強めていると捉えられ、来年度の利上げ観測が再び高まれば米金利と共にドル/円は115円を試す展開もあり得るか。2022年度半ばを想定しているテーパリング終了時期を前倒しし、その後の利上げに早めに動ける余地を作る狙いがあると思われる。今週の経済指標は22日（月）米10月シカゴ連銀全米活動指数、23日（火）米10月中古住宅販売件数、24日（水）米7～9月期GDP（確報）、米FOMC議事要旨（11月会合分）、米11月ミシガン大学消費者マインド（確報）、米10月新築住宅販売件数が予定されている。

### （3）先週までの相場の推移

先週（11/15～11/19）の値動き：　安値 113.59 円　高値 114.97 円　終値 114.03 円




（資料）ブルームバーグ

## 2. ユーロ

市場営業部　為替営業第一チーム　原田　和忠

**(1)今週の予想レンジ:**　1.1180　～　1.1430　　127.50　～　130.00　円

**(2)ポイント【先週の回顧と今週の見通し】**

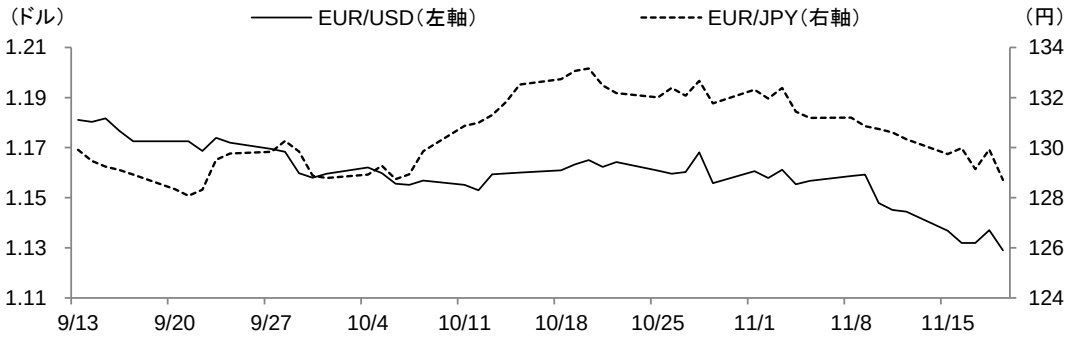
先週のユーロ/ドル相場は年初来安値を更新した。週初15日、1.1440付近でオープンしたユーロ/ドルは一時週高値の1.1464まで上値を伸ばすも、米11月NY連銀製造業指数の良好な結果や米長期金利上昇が重石となり1.13台半ばまで急落。その後小反発も戻りは鈍い動きとなった。16日、ユーロ/ドルは前日のドル買いの流れが継続。複数の米経済指標の力強い結果を受け1.13台前半まで下落した後、小反発するも米長期金利上昇に伴うドル買いに押され1.13台前半まで続落した。17日、ユーロ/ドルは前日のドル買いの流れが継続する中で1.1263まで続落。その後は、軟調な米経済指標の結果や米金利低下に伴うドル売りから1.13台前半まで持ち直した。18日、ユーロ/ドルは1.13台前半での小動きだったが、ポジション調整の動きやユーロ/円の上昇に連れ高となり1.13台後半まで値を戻し、その後も堅調に推移した。19日は、海外時間にオーストリアロックダウンのニュースやドイツも追随するのではとの見方から急落し年初来安値を更新、1.1250をタッチ。その後はやや反発し、1.13丁度で越週した。 対円では、15日に130.46円でオープンしたユーロ/円は、米経済指標の良好な結果に米金利が上昇する中、下落を開始。16日は、129円台後半で小動き。しかし17日に入り、ドル買いの流れが継続し、ユーロ/ドルが下落する中、129.05円まで下落した。18日は129円台後半まで反発したものの、19日にロックダウンのヘッドラインを受けて128円丁度を割れ、128.65円で越週した。

今週のユーロ/ドルは、軟調な展開を予想する。ワクチン接種率が比較的高いユーロ圏ではあるものの、足許で新型コロナウウィルスの感染が再拡大。オーストリアでは今週からロックダウンが実施され、ドイツでもロックダウンの可能性に保健相が言及するなど、不安材料が出てきている。直近の欧7～9月期実質GDP成長率は前期比+2.2%と回復基調にある中において、年末クリスマスシーズンの経済動向に影を落とす形となっている。今後は、ブースター接種の拡大などによっていかに落ち込みを回避できるかがポイントとなろう。他方、米国では資源価格上昇や雇用のミスマッチで生まれたボトルネックを背景とした米CPIの高止まりで、早期利上げ観測が高まっている。現状では、FRBが利上げに対する姿勢を急速に変える動きは見せていないものの、インフレ率の高止まりは利上げを前倒しさせる可能性がある。一方で、ECB関係者からは来年の利上げを否定する発言が相次いでいる。こうした対照的な姿勢の違いにより、ユーロ/ドルは引き続き軟調地合いが続くと予想される。重要な経済指標としては、23日(火)に独11月PMI、欧11月PMI、24日(水)に独11月IFO景況感指数の発表を予定している。

**(3)先週までの相場の推移**

先週(11/15～11/19)の値動き:　(対ドル)　安値　1.1250　　高値　1.1464　　終値　1.1300

(対円)　安値　127.99　　高値　130.60　　終値　128.65




(資料)ブルームバーグ

## 3. 英ポンド

欧州資金部　本多 秀俊

**(1)今週の予想レンジ:**　1.3350　～　1.3550　　152.00　～　154.50　円

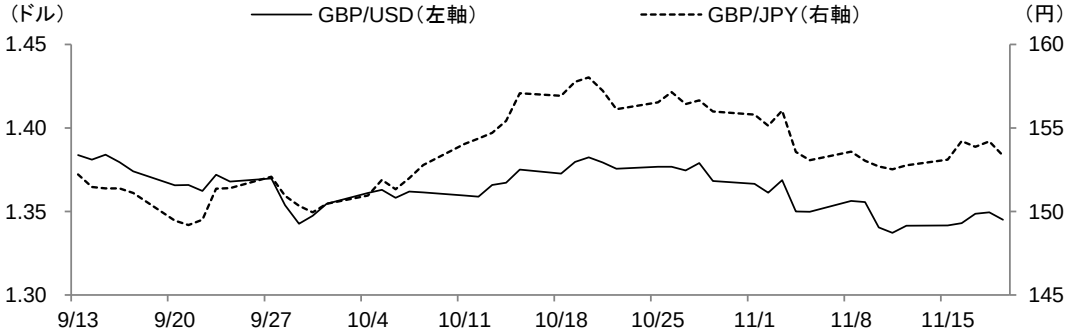
**(2)ポイント【先週の回顧と今週の見通し】**

先週の英ポンド相場は、対ドルでは、年初来安値圏におけるじり高推移が先行、週引け前に急反落したものの、振り返って小幅水準を切り上げた。対円でも、週引け前に急落した結果、週を振り返って僅かに水準を切り上げたにとどまったものの、取引水準は、むしろ年初来(2016年6月来の)高値圏に近かった。対ユーロでの値動きは対ドル、対円とは一線を画しており、ほぼ一方的なじり高推移先行で、20か月超ぶりの高値を更新した後、同水準に高止まりしたまま週の取引を終えた。対ユーロでの値動きから読み取れたのは、この間、ポンドは「ドル側」の通貨、すなわち利上げ開始が近い側の通貨だった可能性。10日以降進んだドル全面高は、米10月CPI(10日)、同小売売上高(16日)など米経済指標の明確な上振れを受けた米連銀利上げ前倒し観測だったが、英経済指標も、英10月CPI(17日)が市場予想前年比+3.9%のところ同+4.2%、同小売売上高(19日)が市場予想同-1.9%のところ同-1.3%と相次いで上振れ、英中銀による12月利上げ観測をまたぞろ浮上させることになった。対照的に、欧州中銀のラガルド総裁は、15日、「(22年中に利上げに着手する可能性は)極めて低い」などと述べ、市場の利上げ期待形成を牽制していた。週引け直前の対ドルでのポンド急落は、円全面高を受けたポンド/円急落に引っ張られた値動きで、対ユーロではほとんど値幅を出さなかった。同日、オーストリア政府が全面的なロックダウンを22日から最長20日間導入すると発表。欧州におけるコロナ禍拡大=経済活動停滞に対する警戒感の高まりが、欧州株全般の急落を招き、通貨市場においてはリスク回避の円高が進行した。

今週の英ポンド相場は、方向感に乏しい横ばいを予想。WHOが欧州をパンデミックの「震源地」と指摘してから2週間ほど経過したが、オーストリア以外にも、ワクチン未接種の人たちだけを対象にした行動制限を導入したり、マスク着用義務を再導入したりした国は多い。オーストリアが先行してフルロックダウンを導入するとした背景には、「クリスマスのロックダウンだけは回避したい」との思惑が強くあったはずで、同様の思惑から、ドイツなどの周辺国がオーストリアに追随する可能性は窮めて高い。自由なクリスマス(昨年はロックダウン中だった)を待ち望んでいるのは英国も同様で、コロナ禍動向の高止まりや、デルタ株から派生した「AY.4.2」型の足元感染拡大などに鑑みれば、英国も時限的なロックダウンに踏み切る可能性は十分に考えられる。その場合、経済活動停滞に対する懸念だけでなく、英中銀12月利上げがまたぞろ先送りされる可能性も考慮に入れる必要があろう。11月の金融政策委員会前には、金融政策動向に関し頻繁に情報発信した英中銀首脳だが、ここもと目立った発言が聞かれていない。先週19日にはピル委員(チーフエコノミスト)が、「(利上げ/据え置きの判断は)精妙に均衡している」とした上で、利上げ実施のための環境が整ったと立証するよりも、それを見送る理由の方を探しているという趣旨のハト派寄りの発言をしていたが、ポンドが材料視した様子は読み取れなかった。今週は、23日(火)と25日(木)にハスケル委員(ハト派)、23日(火)と25日(木)にベイリー総裁、23日(火)にカンリフ委員、24日(水)にテンレイロ委員、26日(金)にピル委員などがそれぞれ発言する機会がある。いずれも11月4日(木)には金利据え置きに投票した面々(利上げに票を投じたの2名はソーンダース委員とラムズデン副総裁)で、とりわけ、ここもと金融政策動向に関する言及がないカンリフ委員の発言には一定の注目を払っておきたい。

**(3)先週までの相場の推移**

先週(11/15～11/19)の値動き:　(対ドル)　安値　1.3400　高値　1.3514　終値　1.3443
(対円)　安値　152.53　高値　154.74　終値　153.34




(資料)ブルームバーグ

## 4．豪ドル

市場営業部　為替営業第二チーム　上野　智久

**(1)今週の予想レンジ:**　0.7150　～ 0.7350　　81.50　～　84.00　円

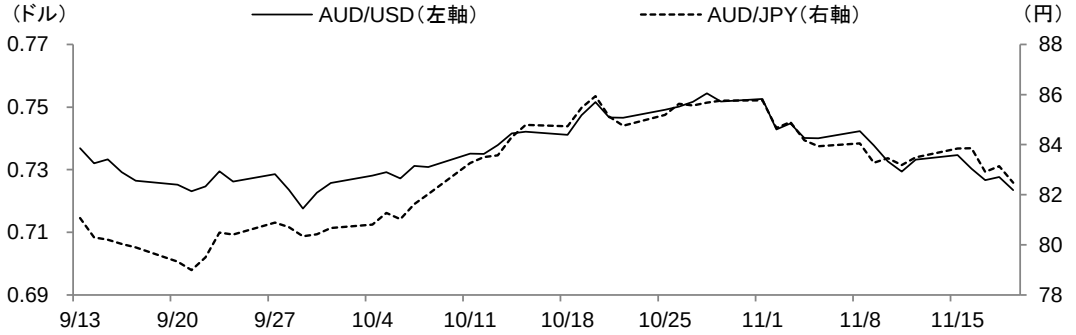
**(2)ポイント【先週の回顧と今週の見通し】**

先週の豪ドル相場は軟調な展開。週初15日の豪ドルは0.7330近辺で取引開始。中国10月小売売上高・鉱工業生産が予想比強めの結果となったことで豪ドル買いが優勢の展開となり、週高値の0.7370まで上昇。その後、NY時間に発表された米11月NY連銀製造業景気指数が事前予想を大幅に上回る結果となると米国債利回りが上昇。ドル買いが強まる展開に、豪ドルは0.7350近辺まで小幅に売り戻される展開。16日、序盤は前日の米金利上昇の流れが豪国債市場に波及し、豪ドルは前日高値レベルまで上昇。しかし、注目のロウRBA総裁による講演で「最新のデータと予測は2022年のキャッシュレート引き上げを正当化しない」と発言。市場が織り込む2022年利上げに関して可能性が非常に低いとのスタンスが改めて示される結果となり、豪ドルは序盤の上昇幅を縮小。加えて、NY時間の米10月小売売上高（速報値）が市場予想を大幅に上回った事から米国債利回り上昇。ドル高の反応となり豪ドルは一時0.73割れまで下落。17日は豪7～9月期賃金指数が事前予想通りの結果となったことで早期利上げ観測が後退。株式市場が下げ幅を広げる動きもあり、一時0.7260近辺まで下落。18日、前日からの流れが継続し売り先行の展開。0.72台半ばを付けた後は、小幅買い戻され0.7280付近で引けた。19日、アジア時間は落ち着いた取引だったが、オーストリアが22日にロックダウン入りとの報道、ドイツも保健相がロックダウンの可能性を排除しないとの見方を示したことでリスク回避の動きが強まると、豪ドルは週安値の0.7228まで下落。結局0.72台前半で越週している。

今週の豪ドルは上値の重い展開を予想する。先週のロウRBA総裁のハト派発言（前述のほか、「最初の利上げは2024年より前とはなりそうにない」と発言）、並びに豪7～9月期賃金指数の結果を受けて、豪州における早期利上げ観測は大きく後退したように思う。対照的に、米国に関してはインフレ高進などもあり、利上げ期待が醸成されやすい環境という認識。金融政策を踏まえると、地合いとして豪ドルは上値の重い展開になりやすいと考えている。加えて、足元欧州におけるコロナ感染拡大にかかるヘッドラインがリスクセンチメントを冷やしている状況。米感謝祭以降、欧米勢が休暇シーズンに入ることに鑑みると投機筋などがリスクを取りに行く動きも期待しにくいのではと考えている。

**(3)先週までの相場の推移**

先週（11/15～11/19）の値動き:　（対ドル）安値　0.7228　高値　0.7370　終値　0.7237
（対円）安値　82.16　高値　84.16　終値　82.49




（資料）ブルームバーグ

当資料は情報提供のみを目的として作成したものであり、特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。当資料は信頼できると判断した情報に基づいて作成されていますが、その正確性、確実性を保証するものではありません。ここに記載された内容は事前連絡なしに変更されることもあります。投資に関する最終決定は、お客様ご自身の判断でなさるようにお願い申し上げます。また、当資料の著作権はみずほ銀行に属し、その目的を問わず無断で引用または複製することを禁じます。なお、当行は本情報を無償でのみ提供しております。当行からの無償の情報提供を望まれない場合、配信停止を希望する旨をお申し出ください。